

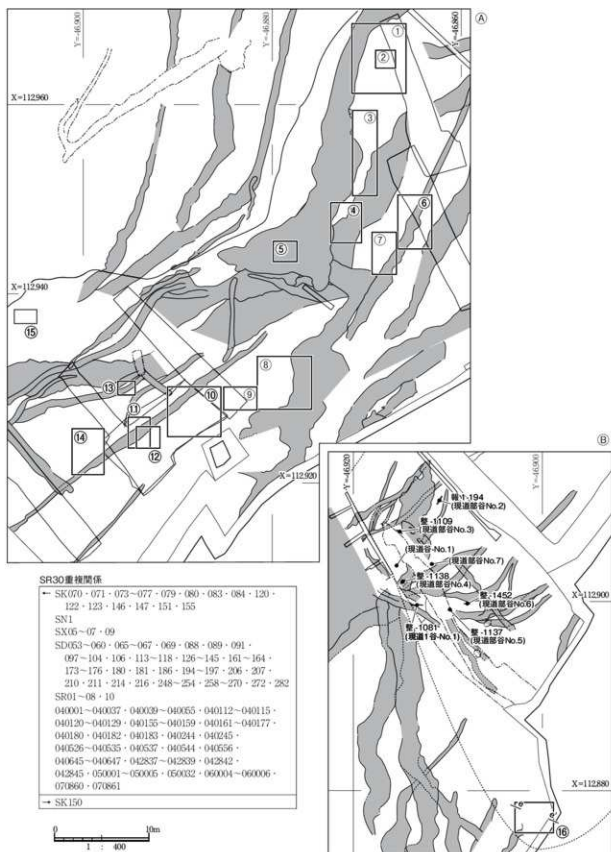


図530 SR30 遺物出土状況配置図・遺物出土状況 1

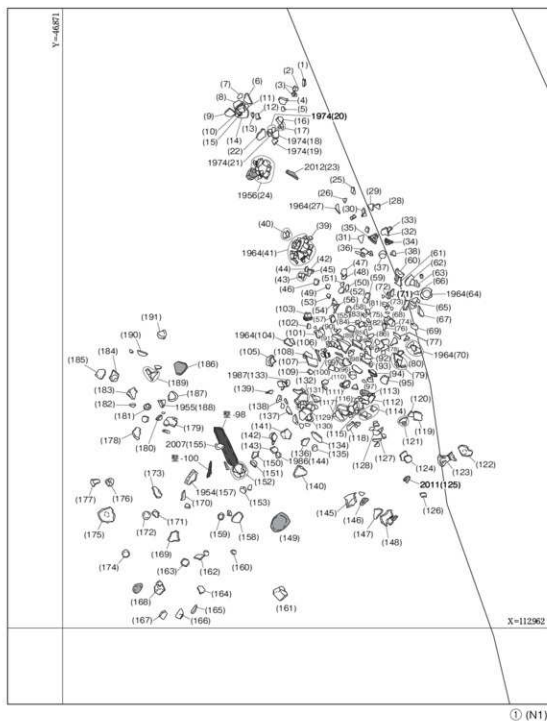


図531 SR30 遺物出土状況 2

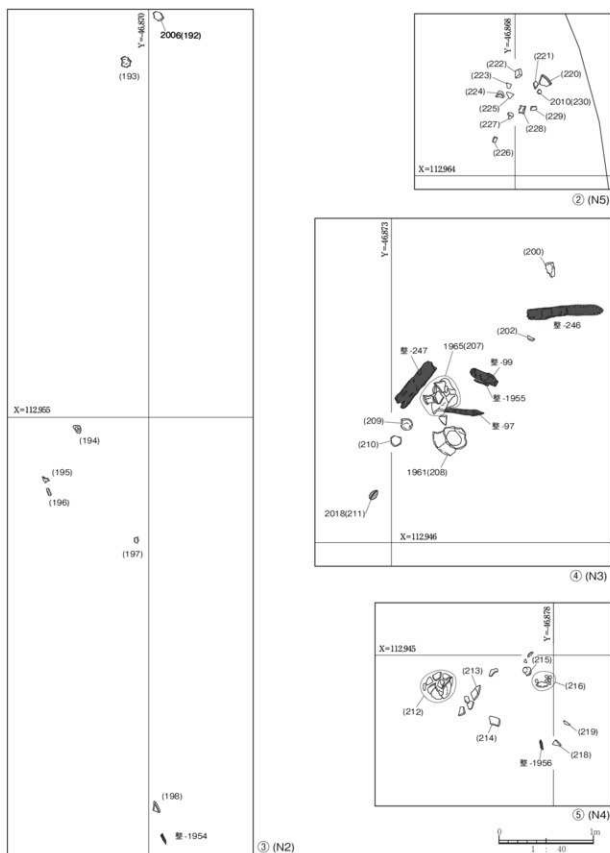


図532 SR30 遺物出土状況 3

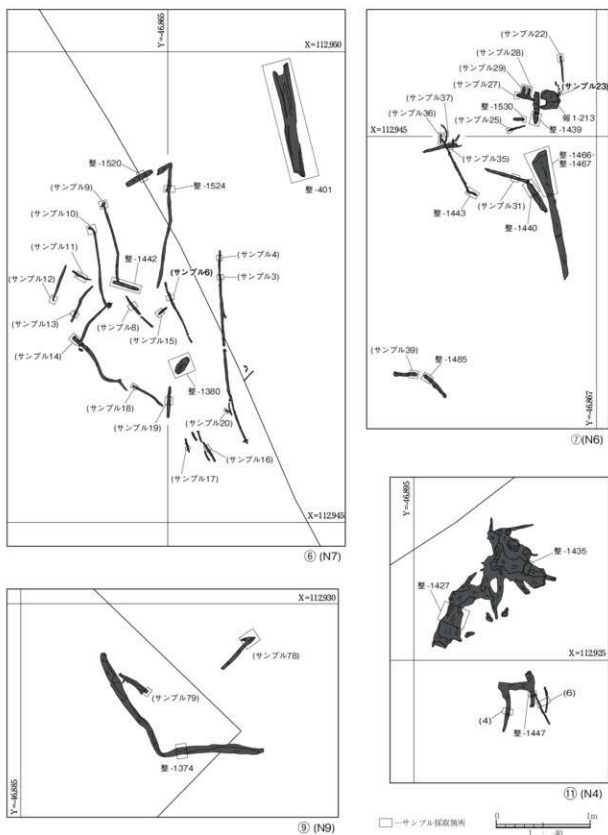


圖533 SR30 遺物出土狀況 4

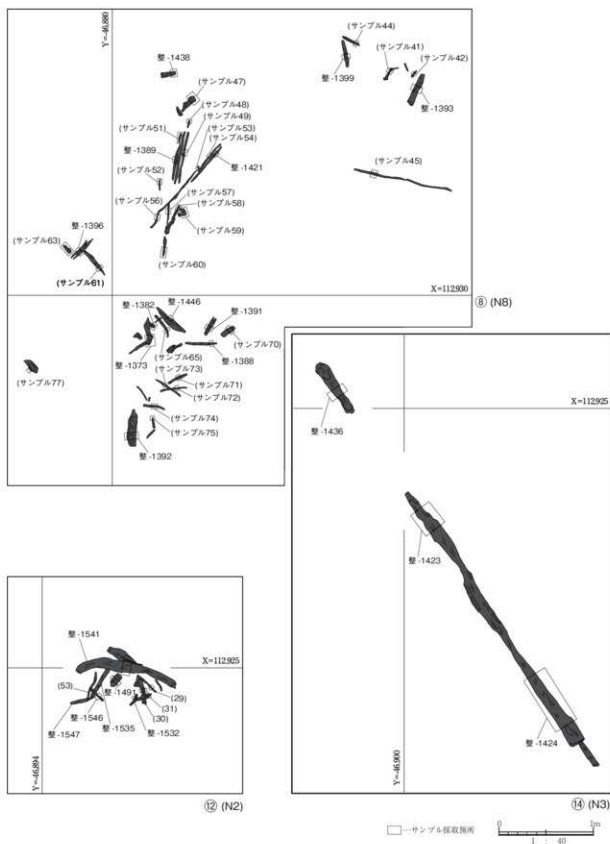
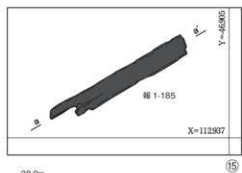
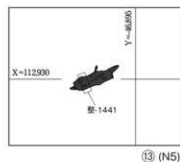
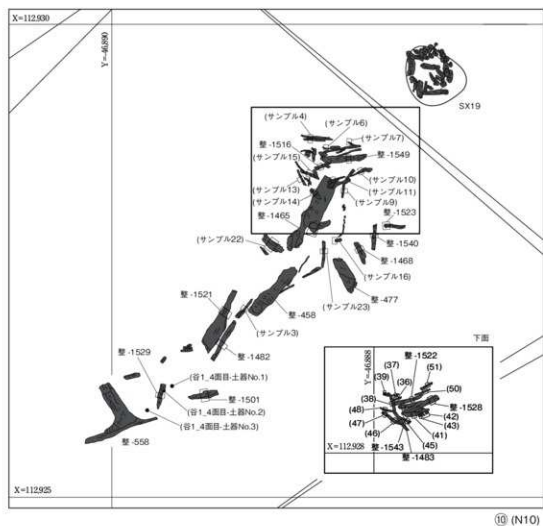


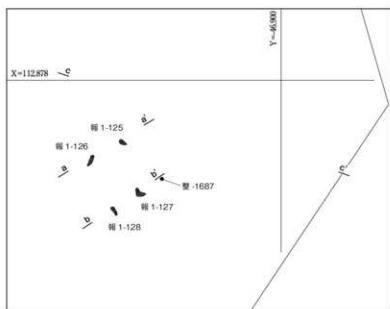
図534 SR30 遺物出土状況 5



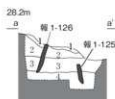
□ サンプル採取箇所



図535 SR30 遺物出土状況 6

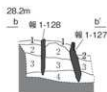


⑩ (谷 4SA)



a-a' 埋土

層名	色	調	Munsell	土 質	粘性	粒度	堅硬度	備 考
1	灰	白	2.5Y7/1	中砂/砂質	なし	-	極硬	
2	灰	黒	2.5Y2/1	中砂/砂質	中	-	中	
3	灰	オリーブ	7.5Y6/2	シルト/砂質	強	-	硬	
4	黒	黒	2.5Y3/2	シルト/砂質	強	-	硬	



b-b' 埋土

層名	色	調	Munsell	土 質	粘性	粒度	堅硬度	備 考
1	灰	白	2.5Y7/1	中砂/砂質	なし	-	極硬	
2	灰	黒	2.5Y2/1	中砂/砂質	中	-	中	
3	灰	灰	7.5Y5/1	中砂/砂質	中	-	中	
4	灰	黄	2.5Y7/2	中砂/砂質	なし	-	極硬	



c-c' 埋土

層名	色	調	Munsell	土 質	粘性	粒度	堅硬度	備 考
1	黒		5Y2/1	シルト/粘質	強	-	硬	
2	オリーブ	黒	5Y3/2	中砂/砂質	弱	-	極硬	
3	黒	黒	2.5Y3/1	細砂/砂質	弱	-	硬	
4	黒	黒	10YR17/1	細砂/粘質	強	-	硬	
5	オリーブ	黒	5Y3/1	細砂/粘質	強	-	硬	



図536 SR30 遺物出土状況 7・断面

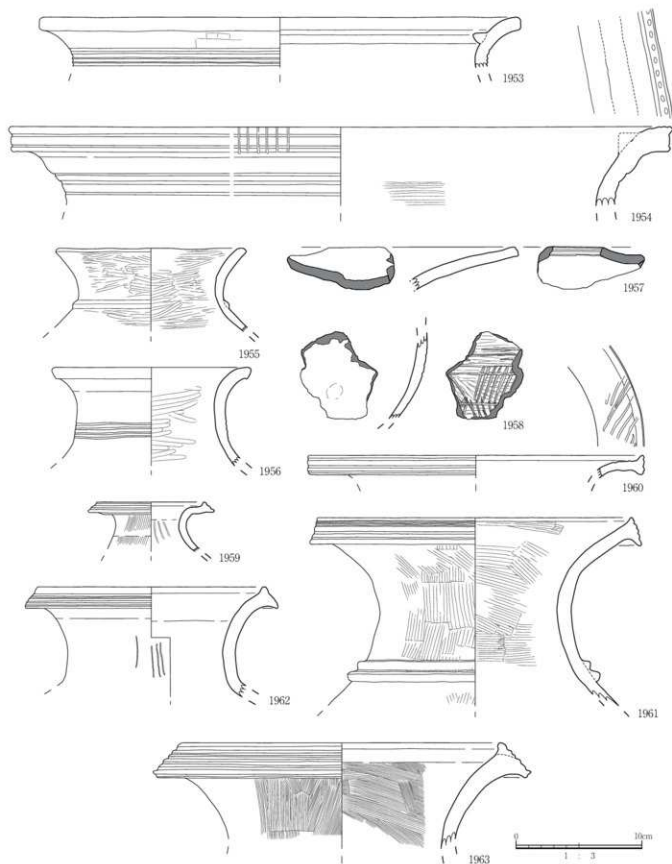


図537 SR30 出土遺物 1

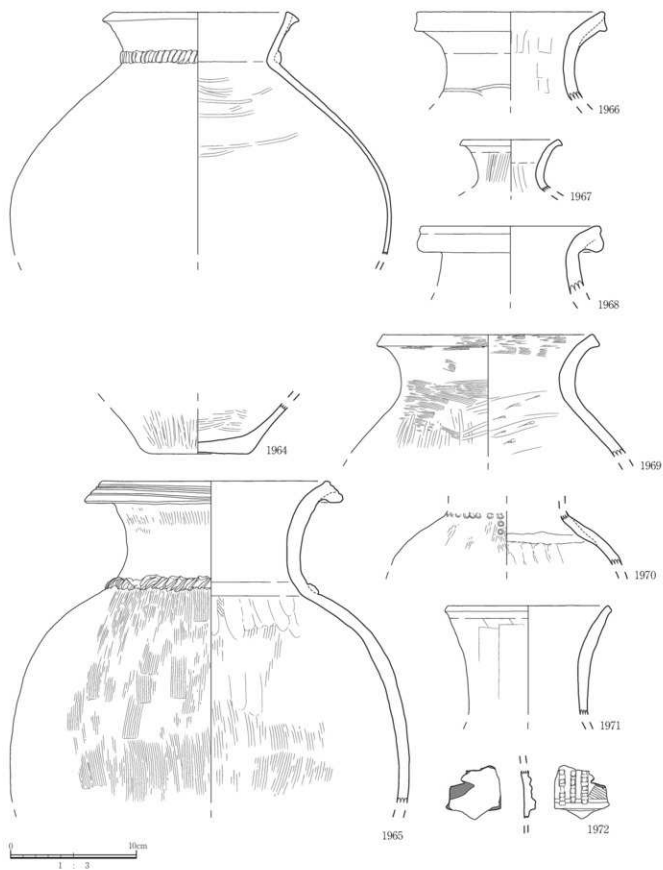


图538 SR30 出土遺物 2

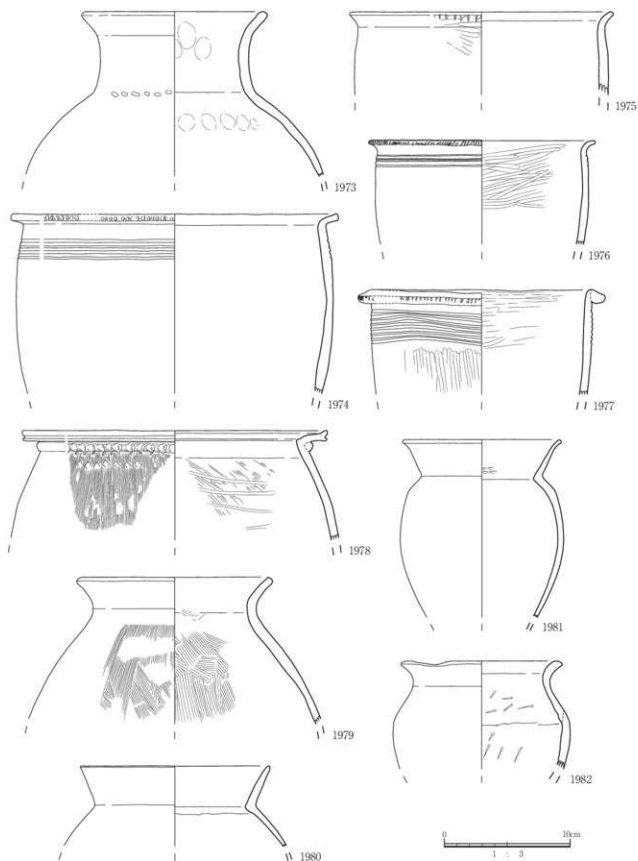


図539 SR30 出土遺物 3

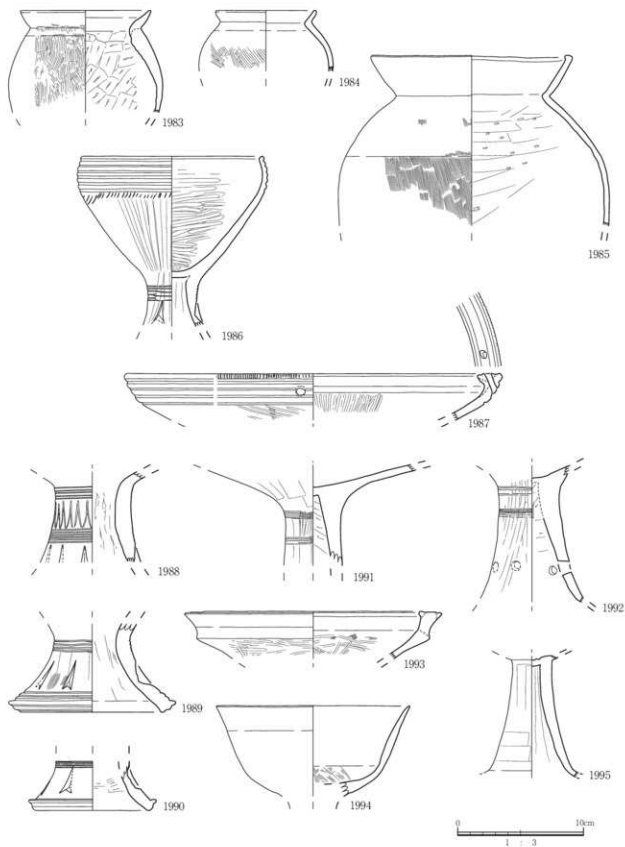


図540 SR30 出土遺物 4

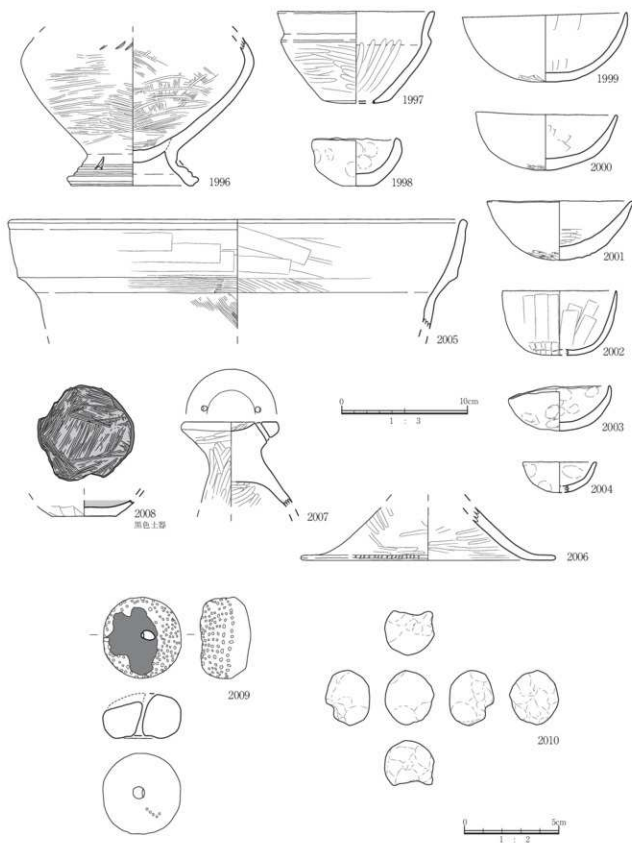


図541 SR30 出土遺物 5

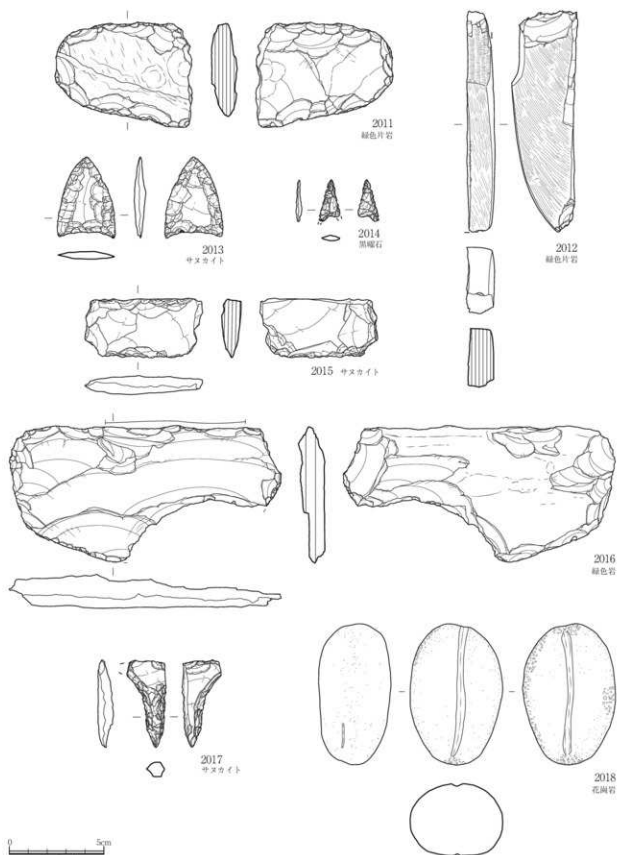


図542 SR30 出土遺物 6

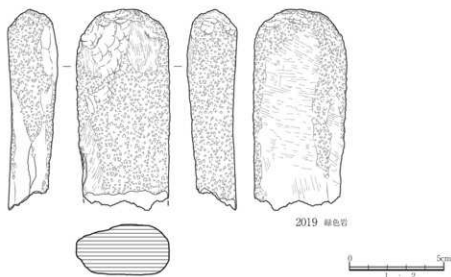


図543 SR30 出土遺物 7

れ、研磨はおこなわれていない。2か所に穿孔を試みた敲打痕が残る。剥離整形工程までを終えた製作途中品だろう。2012は淡緑色の緑色片岩製柱状片刃石斧で、基部とA面左側を欠損する。浅い挟りをもち、研磨はほぼ全面に及ぶ。2013はサヌカイト製の凹基式石鏃、2014は姫島産黒曜石製の凹基式石鏃である。2015はサヌカイト製のスクレイパーである。上部は截断された後、A面側の稜線に敲打がおこなわれる。2016は緑色岩製の素材とした。A面上半部に敲打痕はみられるが、刃部などは形成されていない。2017はサヌカイト製石鏃である。2018は花崗岩製の有溝石鏃である。卵形の前石の長軸方向に1条の擦切による溝が巡らされている。2019は緑色岩製の石棒で下部を欠損する。ほぼ全面に敲打痕が認められ、一部には研磨痕もみられる。横断面形は扁平な楕円形状で、B面左側の厚みが少ない。

(3)時期 1980・1985・1994・1995などから古墳時代前期(I-1～I-2期)と考えられる。この時期は古墳時代前期(I-1期)のSR11の流路から連続する基本層序IVcに相当するとみられる。なお、弥生時代後期前葉～中葉(V-1～V-3様式)を主要時期とするSR25・27からの流路に連続する層も堆積しているのは確実で、この層は基本層序IVd層に対応するのだろう。同時期の多量の遺物はSR25・27から連続する層に伴う蓋然性が高い。

24 SR31 (7区-SR10)

遺物(図544) SR11付近でSR31として取り上げた遺物である。

土器 2020は弥生土器壺で、頸部から外反して口縁部が伸びる。口縁端部は若干拡張する。2021・2022は弥生土器鉢である。

石器 2023は淡緑色を呈する緑色片岩製の石庖丁である。背部の一部を除き、周縁部はすべて欠損しており、本来の平面形は不明である。A面、B面ともに明瞭な剥離面ではないため、素材は

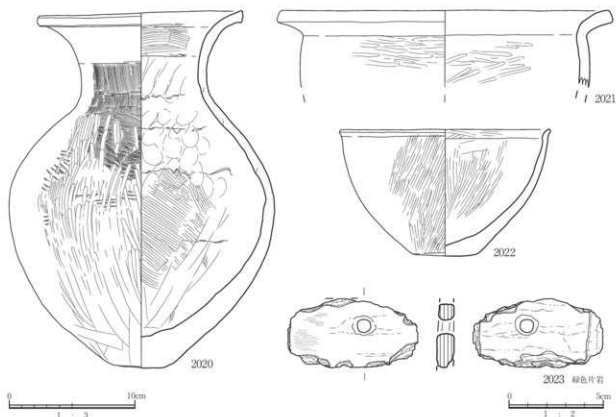


図544 SR31 出土遺物

原石である蓋然性が高い。A面左部の一部にのみ研磨痕が残る。残存する紐穴は1孔で、両側縁部方向への距離を考慮すると、本来1孔のみであった可能性がある。孔は回転穿孔による。

(遺構：石貫・首藤・柴田、土器：乗松・山口、石器：乗松、鉄器：石貫、時期：乗松・石貫)

第7節 小穴

1 SP100005 (10区-SP5)

(1)遺構(図545) 平面形は円形で、規模は長軸が0.47m、短軸は残存で0.38m、最大深度は0.27mである。弥生土器壺が出土した。

(2)遺物(図546)

土器 2024は弥生土器壺で胴部上位と頸部部境には削り出し状の沈線文帯が認められる。外面には丁寧な横位のミガキがおこなわれている。

2 SP110016 (11区-SP16)

遺物(図546)

土器 2025は弥生土器高杯の細身の脚部で、3帯の沈線文帯が施されている。

3 SP120010 (12区-SP10)

(1)遺構(図545) 平面形は楕円形で、規模は長軸が残存で1.36m、短軸も残存で0.63m、最大深度は0.31mである。埋土は3層である。第2層と第3層は炭化物を含有する。

(2)遺物(図546)

土器 2026は弥生土器壺である。

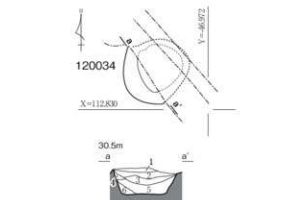
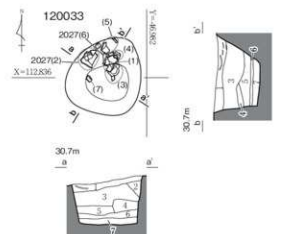
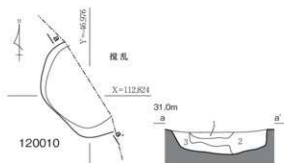
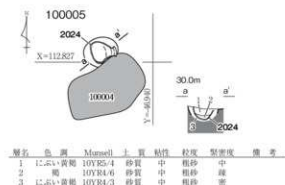


図545 SP100005・SP120010・SP120033・SP120034 平面・断面

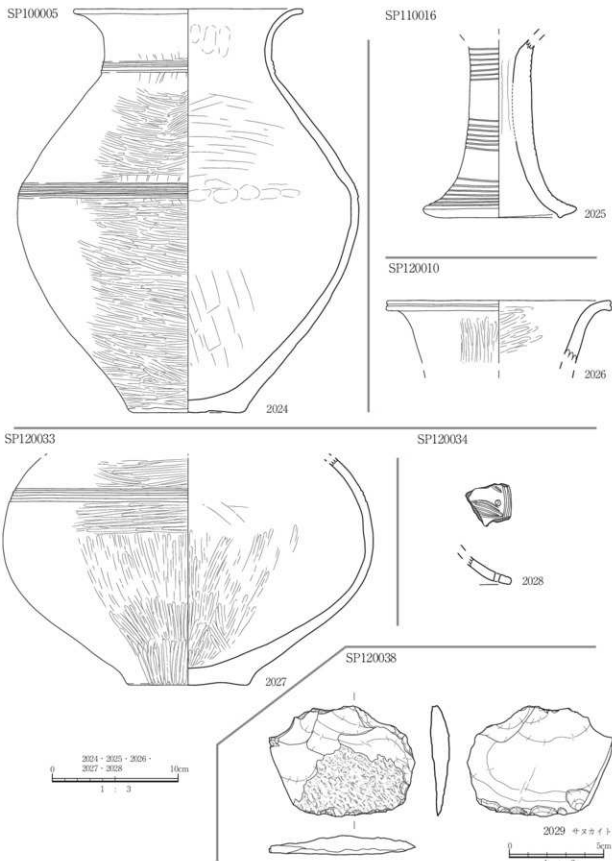


図546 SP100005・SP110016・SP120010・SP120033・SP120034・SP120038 出土遺物



図547 遺構外 出土遺物 1

4 SP120033 (12区-SP33)

(1)遺構(図545) 平面形は円形で、規模は長軸が1.12m、短軸は0.99m、最大深度は0.68mである。1層から弥生土器がまとまって出土した。

(2)遺物(図546)

土器 2027は弥生土器壺で、胴部上位には3条の沈線文が巡る。

5 SP120034 (12区-SP34)

(1)遺構(図545) 平面形は円形で、規模は長軸が残存で0.90m、短軸も残存で0.87m、最大深度は0.34mである。

(2)遺物(図546)

土器 2028は弥生土器壺で、上面には木葉文、端部には円形孔が認められる。

6 SP120038 (12区-SP38)

遺物(図546)

土器 2029はサヌカイト製スクレイパーで、下端部が刃部とみられる。

(遺構：石貫、土器・石器：乗松・山口)

第8節 遺構外出土遺物

土器 2030～2033は弥生土器壺である。2030の頸部には7条の沈線文、口縁端部には刺突文が巡る。2031の口縁端部上面には竹管文、2032の胴部上位には列点文状の刻目文が認められる。2033は口縁端部に4条の凹線文と円形浮文をもつ。2034は弥生土器甕の底部である。2035は土師器甕である。2036は2段の矢羽根形透孔を有する弥生土器高杯の脚部で、外面には赤色顔料が塗布さ

試掘

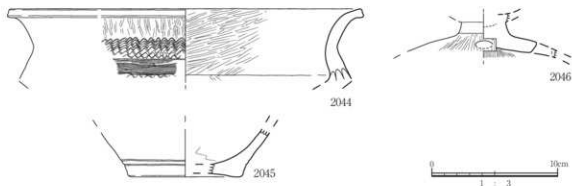


図548 遺構外出土遺物 2

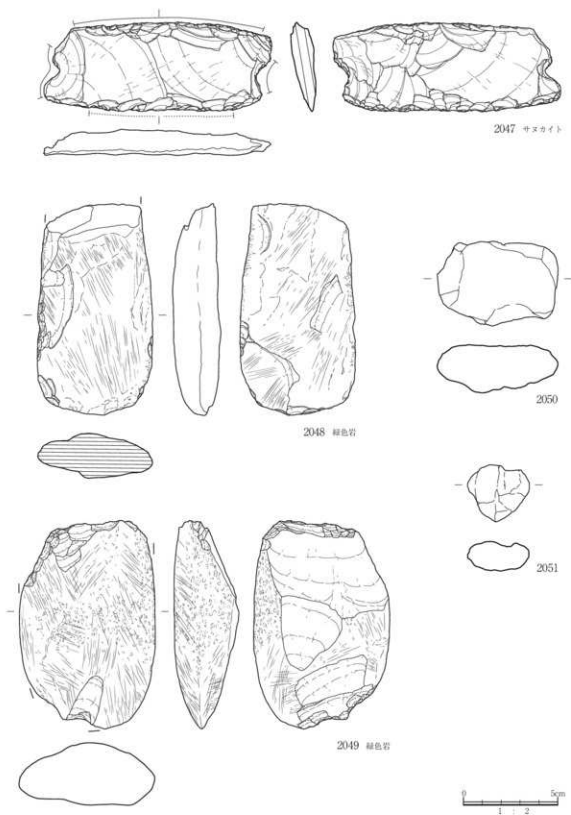


図549 遺構外 出土遺物 3

れている。2037～2041は弥生土器鉢である。2042・2043は弥生土器器台で、いずれも胴部に2段の円形透孔をもつ。2044・2046は試掘トレンチH23_T22(浅谷1-B・10区)出土の遺物である。2044は弥生土器複合口縁壺で、口縁部外面に波状文と直線文が施されている。2046は土師器碗形高杯である。2045は試掘トレンチH26_T3(低位段丘1-A・浅谷1-A・10区)から出土した弥生土器壺の底部である。

石器 2047はサヌカイト製の石庖丁で、横長剥片を素材とし、背部とA面右側の縁辺部の一部に自然面を残す。背部と両側縁の挟りは敲打による。刃部と体部上半にわずかに摩耗が認められる。2048は上部を欠損する両刃石斧で、風化して淡緑色を呈するが石材は緑色岩とみられる。横断面形は扁平な楕円形状である。剥離後の研磨は全体に及ぶが、粗いため剥離面の一部が残存する。また、刃部から側縁部にかけては敲打痕も残る。敲打痕は使用に伴うものだろう。2049は横断面形が扁平な楕円形を呈する両刃石斧である。風化が顕著で石材の特定は難しいが、緑色岩の可能性もある。刃部の先端付近と基部を欠損する。体部のほぼ全体が研磨される。敲打痕も認められるが、風化のために研磨面が失われて敲打痕が露出していると考えられる。

鉄器 2050・2051は鉄滓である。2050は長軸幅6.34cm、短軸幅4.45cm、最大厚2.30cm、重量115.42gである。断面形状が碗状になっており、碗状滓の可能性もある。2051は長軸幅3.26cm、短軸幅3.03cm、高さ1.52cm、重量14.45gの不整形な鉄滓である。

(土器：乗松・山口、石器：乗松、鉄器：石貫)

注

- *1 愛媛大学村上恭通氏にご教示いただいた。
- *2 奈良文化財研究所山本 崇氏、桑田訓也氏、垣中健志氏にご教示いただいた。
- *3 図中の表で示されている樹種については鳥取大学中原 計氏にご教示いただいた。

報告書抄録

ふりがな	にやもりのまえいせき2じ3(じょうもんじだい～こふんじだいでんき なんぶへん)							
書名	新谷森ノ前遺跡2次3(縄文時代～古墳時代前期 南部編)							
副書名	一般国道196号今治道路(今治湯ノ浦IC～今治朝倉IC間)埋蔵文化財調査報告書 12							
巻次								
シリーズ名	(公財)愛媛県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第206集							
編著者名	乗松真也(編著)、中野邦子(編)、石貫弘泰・山口莉歩・首藤久士・柴田圭子(著)							
編集機関	公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター							
所在地	〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1 TEL (089) 911-0502							
発行年月日	西暦 2025年 8月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	" "	" "			
にやもりのまえ 新谷森ノ前 いせき 遺跡2次	まひめけんいまほりし 愛媛県今治市 にや 新谷		38202	34°01'02"	132°59'29"	20120406 ～ 20180501	[平面積] 61,888 [総面積] 75,250	一般国道 196号 今治道路 建設工事

発掘調査報告書 第206集

新谷森ノ前遺跡2次3
(縄文時代～古墳時代前期 南部編)

(本文編)

令和7年8月
(2025)

編集・発行

公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
愛媛県松山市衣山四丁目68-1
TEL (089) 911-0502

印刷・製本

株式会社ハラブレックス